	論文の和文要旨
論文題目	ラテンアメリカ主義のレトリック
氏名	柳原孝敦

本論は、「ラテンアメリカ主義」と呼ぶべきイデオロギーを一つの言説として捉え、その生成の仕方、生成の過程で入り込んでくる時代性や問題点を分析したものである。

第１章ルベン・ダリーオの災禍――ラテンアメリカ主義のレトリック

ここでは、１９世紀末スペイン語圏を席巻したモデルニスモという詩の潮流の領袖とされる、ニカラグワの詩人ルベン・ダリーオが、１９１０年公職を剥奪されるという事件から語り起こし、彼の詩を、まず、アリエル主義という潮流に位置づける。アリエル主義とはウルグワイの批評家ホセ・エンリケ・ロドー『アリエル』（１９００）の反響の中でできた反アメリカ合衆国、汎ラテンアメリカ（イスパノアメリカ――スペイン語圏のアメリカ諸国――）の主張である。しかしこのアリエル主義は、さらに歴史化すればラテンアメリカ主義と呼ぶことのできる思潮であるとして、ラテンアメリカ主義を、その起源であるコロンビアの作家ホセ・マリア・トーレス=カイセードを紹介しながら記述する。

ラテンアメリカ主義とは、１９世紀的な人種・民族概念（ゲルマン、アングロサクソン、ラテン、等々）に基づき、アングロサクソンのアメリカ（アメリカ合衆国）との対比でラテンのアメリカを称揚するイデオロギーである。合衆国への対抗意識から、一つの国民を目指すものであるという意味において、それはナショナリズムとパラレルな言説となる。しかし合衆国との対比で一つの国民を創出しようという言説ならば、『アリエル』以前に敵としてのアメリカ合衆国の像は出来上がっていたわけで、私たちはそれをパンアメリカ会議（１８８９）に際して警告を発したホセ・マルティに読み取った。

さらに、ラテンアメリカ主義が披露された二つの主要なテクストを分析しながら、これがダリーオを待って完成される言説であること、しかしその中に、政治における敗北を含む言説であることを確認した。ラテンアメリカ主義とは政治において敗北し、文学において勝利する言説なのだ。

第２章　とまどう放蕩息子――モデルニスモのモラルとラテンアメリカ主義

第２章ではまず、ルベン・ダリーオの短編小説「青い鳥」を分析し、１９世紀後半、消費社会が訪れる中で、ブルジョワ的消費を否定しつつも、それと密接な関係を取り結びながら自らのアイデンティティを打ち立ててゆくボヘミアンのモラルを、モデルニスモのそれであるとした。そしてダリーオが急進的なラテンアメリカ主義者となった転換点と言いうるテクスト「キャリバンの勝利」の中に、ボヘミアンのモラルそのままに、金融という新たな経済体制を前に戸惑い、強い拒否反応を示している彼の姿を読み取った。ラテンアメリカ主義とは、こうして、経済体制においても敗北を選び、経済の変化についていくことのできなかった言説とされる。

第３章　街灯、吊り橋、鉄塔――ホセ・マルティ、文化概念の生産

ラテンアメリカ主義とは、合衆国の強大さ（政治・経済面における強大さ）に対抗して、ラテンアメリカの文化を称揚する言説でもある。第３章では、キューバの詩人・思想家ホセ・マルティのジャーナリズム作品の中に、文化の概念がどのように生産されるのかを分析した。それは失われた近過去として、あるいはここにはない何者かとしてテクストの中に産出される。アメリカ合衆国、即ちラテンアメリカ主義にとっての敵の懐中にあったマルティは、合衆国のテクノロジーの達成と大衆文化に幻惑されながらも、そこにはないものであるラテンアメリカ（彼の言う「我々のアメリカ」）と、その高尚な文化を産出したのである。そしてそれを、ラテンアメリカの国々に発信した。

こうして文化の概念を産み出したマルティは、それを子供たちに伝達することに腐心する。テクノロジーの達成を歴史の概念で補いながら伝達される彼の文化概念は、しかし、典型的な近代の産物であるジェンダーの役割分担や、ヨーロッパ中心史観をも喜んで取り入れているのだった。

第４章　希望の行方――マルティからロドーへ

これまで再三に渡って重要テクストとして名前を挙げながら、分析を怠ってきた二つのテクストを、ここでは扱う。マルティ「我らがアメリカ」（１９９１）とロドー『アリエル』である。

まず「我らがアメリカ」は、これまで言説においてパラレルであるとしたナショナリズ

ムとラテンアメリカ主義が、実際に交錯する場に発表されたものであることを確認した。ラテンアメリカ主義の表出でありながらも、官製ナショナリズムに対抗して、知識人の側からの、具体的にはインディヘニスモの形をとりつつあったナショナリズムと、それは親和性を持っている。そして実際、知ることが重要だという彼の主張は、２０世紀インディヘニスモ的ナショナリズムに取り入れられてゆく。一方で、曖昧な隠喩をちりばめながら希望を語る「我らのアメリカ」であったが、ラテンアメリカ主義が受け継ぐのは、その曖昧さと希望の方なのだ。そのことを『アリエル』に読み取った。

ロドー『アリエル』はその主張内容、論法、象徴主義、曖昧さなど、マルティやダリーオの作り上げたものをただ引き継ぐだけの書に過ぎないのだが、テクスト内に具体的にそのラテンアメリカ主義の伝達の仕方が刻み込まれているのだ。

第５章　メキシコのウェルギリウス／ウェルギリウスのメキシコ――アルフォンソ・レイェスの位置

ロドーが前章で挙げたような特徴を有しているという点に注目したときに、いわゆるアリエル主義者たちのその後の活動は、ロドーの指定したラテンアメリカ主義の伝達法を確実に受け継いでいることがわかる。そのことをメキシコで青年文芸協会 **Ateneo de la Juventud** というサークルを作った作家たちに確認した。しかし、その主張内容となると、いささか趣が異なることを念頭に置き、アルフォンソ・レイェスの１９３０年の講演「ウェルギリウスをめぐって」を主に分析したのが、第５章である。

これは官製ナショナリズムがラテンアメリカ主義に接近を試みたある行事に際して読まれた講演で、そのためレイェスは、そこにある政治性を独特の仕方で批判している。そのようなスタンスから来るレイェスの態度をイデオロギー的であると同時にメタ・イデオロギー的であるとして、「自己=脱=構築」的と評した。

第６章　クレオール性、クリオーリョ性、ラテンアメリカ主義――カルペンティエールの実践

第６章では、レイェス以後の世代でレイェスの対極に位置づけられるべき実践として、アレホ・カルペンティエールの場合を考察した。レイェスがラテンアメリカ主義を実体化しつつも相対化し得ていたのに対し、カルペンティエールはあくまでもラテンアメリカ主義の枠に留まってはいるものの、その枠内で極めて興味深い記述の実践を敢行している、

というのがここでの観測である。

カルペンティエールの実践は、記述の対象、その手法ともに、彼自身の言うクリオーリョ性の概念として価値づけることのできるものなのだが、クリオーリョ性とは主に混血、文化の混交を表わしており、その意味で近年取り沙汰されることの多いクレオール性に似ている。私たちはそもそもクレオール性の主張がラテンアメリカ主義の論法に似たものであるとしてその類似と差異を検討し、カルペンティエールの文化の記述を、現在の混交状況を存分に描ききったものとして評価するものである。ただし、そうした魅力を彼が見出すのが、厳密に「ラテンアメリカ」の範囲内に限られるものであるとしてその限界を浮き彫りにする。ラテンアメリカ主義とはこのように作家の視点を規定するイデオロギーであるのだ。